

国外における雨中人物画テストの実証的研究の動向

廣田 愛海 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
平野 真理 お茶の水女子大学 基幹研究院

要約

個人のストレス状況下における防衛能力や自己イメージを測定する雨中人物画テストは、日本に導入されて以来、様々な臨床現場において知見が蓄積されてきたが、描画を解釈するための客観的な指標は未だ確立されていない。そこで本稿では、国外で実施された雨中人物画に関する知見を概観するため、国外研究のレビューを行い、今後の日本での活用の課題と展望について検討した。最終的に抽出された 17 本の文献から、国外における雨中人物画研究は①テストとしての有用性の検討、②個人の能力評価としての活用、③介入の効果指標としての活用、に分類された。特に国外では、雨中人物画の評価スケールを開発し、描画を定量的に評価する試みも行われていることが明らかとなった。今後の日本における雨中人物画の活用については、国外の知見を参照しながら、評価スケールを用いた客観的な個人の能力測定や、介入等の質的な効果指標として活用されていくことが期待できると考えられる。

キー・ワード：雨中人物画テスト (Draw-a-Person-in-the-Rain Test), スコーピングレビュー

I 問題と目的

1. 雨中人物画テストとは

雨中人物画テスト (Draw-a-Person-in-the-Rain Test ; Hammer, 1958) は、人物画の一種であり、「雨の中の人」の描画を通して個人のストレス対処や防衛能力を読み取ろうとする投影法の心理テストである。多くの場合、雨はストレス、傘は防衛能力、人は自己が投影されたものとして解釈される。Hammer (1958) の原法における雨中人物画の施行は、A4 サイズの画用紙を縦置きにして、「雨の中の人を描いてください」と教示をする。日本でも当初は原法通りの教示を採用していたが、「人」という刺激語だけでは自己像とは容易に結びつかない集団や人物の抽象表現が出現しやすいことが見いだされた。そのため日本では、主体が自己であることを明確にするために、「雨の中の

私を描いてください」という教示で施行されることが多くなった (澤柳・石川・川口他, 1989)。一般的に、人物画はバウムテストなどと比較すると、意識された自己像や欲求、感情が表れやすいとされている (三上, 1995)。雨中人物画では、人物に加えて「雨」というストレスを象徴する題材が加わることにより、人物表現が賦活され、自己や状況をめぐる個人の内的世界が直接的に表現されやすいことが指摘されている (仲嶺, 2006)。

2. 日本国内での活用

雨中人物画テストが日本で活用されるようになったのは 80 年代後半からで、澤柳他 (1989) によって、森田療法を受ける精神科入院患者を対象に、雨中人物画を用いた調査が行われた。この調査では、患者が退院時に描いた「雨の中で傘を持

たず、ずぶ濡れになっている」雨中人物画を、病院という防御がなくなったことを受け入れている描画であると解釈し、森田療法によって「あるがまま」の受け入れを習得したことが読み取れると報告した。この研究以降、日本では、精神科入院患者（澤柳・石川・稲川他，1991）、アルコール依存症患者（杉野，1995）、物質使用障害患者（板橋，2017）等を対象とした病院臨床領域で用いられてきた。その他にも、中学から大学における学生を対象とした教育現場（丹治他，1993；高橋他，1999；仲嶺，2006；加藤他，2008；仲嶺・島田，2008；森川・平井，2010；森川，2012；野口・馬場，2016）や、虐待児を対象とした福祉領域（緒方，2017a；緒方，2017b）でも活用されている。特に、少年鑑別所に収容された少年を対象とした司法領域（藤掛，2000；久保・雨宮，2001；黒川・宇田，2003；黒川他，2002；丸山他，2003；小澤他，2005；関谷他，2003；宇田・黒川，2002；宇田他，2003；与那覇他，2001；与那覇他，2005；寄重他，2006）では実証的な研究が積み重ねられてきた。ただし、日本の雨中人物画研究の現状としては、雨中人物画の有用性や解釈指標についての検討が試みられているものの、それぞれの研究は臨床領域ごとに行われ、異なる結果が示されている。例えば「人物が雨に濡れている描画」について、病院臨床領域では先述の通り、退院の不安を受け入れていると解釈され、予後が良好な可能性を示唆するポジティブな指標として解釈されている（澤柳他，1989）。しかし非行領域においては、雨の防衛が不十分な描画は、ストレスに対する防衛の不安定さを表すネガティブな指標としての可能性が示された（与那覇他，2001）。このように、雨中人物画には共通した解釈指標が存在していないという問題がある（廣田他，2022）。投影法検査の解釈には社会文化的背景の影響を加味する必要性が大きく、国外の評価基準や解釈をそのまま日本に適用できるものではない。しかし、国内の知見に限界がある現状で、国外の調査研究で積み

重ねられてきた知見を参照することは、日本での雨中人物画の発展を考えた際に非常に有益であると言える。

本研究では、日本国外で実施されている雨中人物画研究のレビューを行い、各研究で示された知見を概観し、国外における雨中人物画研究の動向を検討することを目的とする。また、日本の雨中人物画研究との比較から、日本における雨中人物画の活用の展望についても考察する。

II 方法

国外で実施されている雨中人物画研究のレビューをするにあたり、友利他（2020）によるスコopingレビューのための報告ガイドライン日本語版を参照した。

調査時期は2023年8月1日から2023年8月31日で、文献の検索は第一著者が行った。検索には、学術論文のデータベースである Google Scholar、ScienceDirect を用いて、検索には「“person in the rain”」および「“man in the rain”」を条件とした。

文献を選定する条件として、(1) 雨中人物画の実際のデータを用いた研究であること、(2) 査読付きの学術論文（国際会議議事録を含む）に掲載された論文であること、(3) 英語で執筆されていること、という3つの条件で論文を選定した。選定された文献から、著者、発行年、研究方法、研究内容、対象者、サンプル数、関連を検討した指標、得られた知見、を表にまとめた。

III 結果

1. 対象文献の概要

データベースによる検索の結果、両データベース上で396件がヒットした。重複論文を除外し、タイトルおよびアブストラクトから文献をスクリーニングした。最終的に、前述した条件を満たす論文が17本抽出された（Figure 1）。

抽出した論文の概要について Table 1 に示す。抽出された論文は、1974年から2023年に発行さ

れており、研究実施国は韓国とアメリカが4件と最も多かったが、ロシア、南アフリカ、中国など、様々な国で研究がされていた。論文の選定条件として、雨中人物画を用いた研究としたが、研究内容は、雨中人物画の有用性や可能性を検討した研究(7件)、雨中人物画から個人の状態や能力を測定しようとする研究(5件)、雨中人物画を心理教育などの介入効果の評価に用いた研究(4件)に分類された。本稿において選定された17本の論文については、著者、発行年、調査対象者、研究内容、関連を検討した指標をTable 2にまとめた。

Figure 1 PRISMA-ScR フローチャート

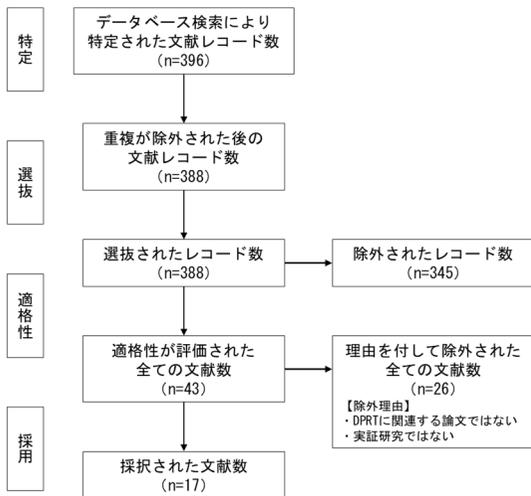


Table 1 論文概要別の抽出件数 (件)

研究実施国	発行年	論文種別	研究内容
アメリカ	1970年代	1 専門誌	15 有用性・可能性
韓国	2000年代	1 議事録	2 状態・能力の測定
ロシア	2010年代	8	介入の評価
南アフリカ	2020年代	7	
イタリア	1		
ウクライナ	1		
中国	1		
インド	1		

2. 雨中人物画の有用性の検討

雨中人物画は Hammer (1958) に紹介されて以来、様々な国や研究者によって、信頼性・妥当性の検討が行われている。

Veninis et al. (1974) は、精神科で治療を受ける思春期の患者の大きな診断カテゴリー(「神経症」「パーソナリティ障害」「精神病/境界性精神病」)を予測することが可能であることを示した。また患者の描画から、「雨」と「防衛の強さ」は、患者が現在受けているストレスの量と関連することが明らかとなり、雨中人物画における実証的研究の第一歩となった。

1990年代以降、Carney (1992) により「雨＝ストレス」という解釈仮説の妥当性を検討する調査が行われた。対象となった青年の描画から、雨に対する防衛が不十分であることは、ストレス要因(雨)に対処する能力が弱っていることを示している可能性があり、雨と雨の防衛がストレスと抑うつとの指標として妥当であることを示した。Rossi (1997) は、主観的なストレスレベルを測るツールとして雨中人物画が有効であることを示した。2000年代に入ってから、雨中人物画の有用性や評価指標となる観点を検討する実証的な研究が行われているが(Krom, 2002; Russo, 2007; Proto, 2007)、先述のCarney (1992) や Rossi (1997) を含め、いずれも博士論文・修士論文であり、正式な論文として発表されていないものだった。

2010年代からは、Willis et al. (2010) によって、Krom (2002) が修士論文において作成したDPRT尺度の改訂版が提案された。DPRT尺度改訂版の信頼性と妥当性を検証するために、精神障害と物質使用障害の患者を対象に調査をした結果、DPRT尺度の「ストレス尺度」において評価者間信頼性が担保されていることが示された。

Graves et al. (2013) は、気候と降水頻度が異なる地域(グレートプレーンズ中央地域、ロッキー山脈地域、太平洋岸北西部)の小学生が描く雨

Table 2 対象となった文献の概要

No.	著者	発行年	研究方法	研究内容	対象	n	関連を検討した指標
①	Verinis et al.	1974	量的研究	DPRT	①精神科外来を受診した青年	①25	②のみ the Taylor Manifest Anxiety Scale (Taylor, 1953) Barron Ego Strength Scale (Barron, 1953)
					②短期入院病院へ入院した成人	②42	
					③慢性精神疾患患者の女性	③13	
					④少年院に収容されていた青年	④43	
					①入院中の思春期患者	①23	
					②短期少年拘留所の患者	②79	
					精神疾患のない高校生	139	
②	Theron	2004	量的/質的	測定	学習困難を抱える青年	20	the Adolescent Self Concept Scale (Vrey & Venter, 1983) the Emotional Profile Index (Roets, 1997) the High School Personality Questionnaire (Madge & Du Toit, 1989) Kritzberg's Three Animal Technique (Brink, 1997) the Three Wishes Technique (Brink, 1997) the Forest Adventure metaphor (L.C. Theron, 2004)
③	Willis et al.	2010	量的研究	DPRT	精神障害と物質使用障害の患者	40 男性: 21 女性: 19	The Coping Resource Inventory for Stress (Matheny et al., 1993) The Perceived Stress Scale (PSS; Cohen et al., 1983)
④	Kravits et al.	2010	量的/質的	評価	看護師	248	MBI-HSS(Maslach et al., 1996)
⑤	Wood et al.	2012	質的研究	評価	親がHIV関連の病気で亡くなった独身または二重の孤児	20	
⑥	Graves et al.	2013	量的研究	DPRT	①~③の地域の小学生	①22	
					①グレートプレーンズ中央地域	②21	
					②ロッキー山脈地域	③15	
					③太平洋岸北西部		
⑦	Demilkhanova	2014	量的研究	測定	①ゲーム依存	①28	HTP (Buck, 1948) DAP (Machover, 1949) Non-existent Animal (Dukarevich et al., 1990) The Life Style Index (Plutchik et al., 1989) Who am I test (Kuhn et al., 1954)
					②薬物依存	②20	
⑧	Chung& Moon	2018	量的研究	DPRT	大学生	162	Stress Coping Behavior (Jeong, 2004)
⑨	Jue& Ha	2019	量的研究	DPRT	兵士	300	軍隊生活調整尺度 (Koo, 2004) レジリエンス尺度 (baek et al., 2003)
⑩	Rjabikina et al.	2019	量的研究	測定	女子大学生	115	STAI (Spielberger, 1970)
⑪	Jue et al.	2020	量的研究	DPRT	徴兵兵士	204	ユニット凝集度スケール (Lee, 2006)
⑫	Kahazova& Shipova	2020	量的研究	測定	化学物質中毒者と親密な(夫婦/親子の)女性	30	the Mayer-Salovey-Caruso Emotional Intelligence Test (Sergienko et al., 2017) Codependency Assessment Inventory (Weinhold et al., 2008) Ways of Coping Questionnaire in Russian (Kryukova, 2010)
⑬	Li et al.	2021	量的研究	DPRT	大学生	155	the Stress Reaction Questionnaire (Zhong et al., 2004)
⑭	Mittal& Mahapatra	2021	量的/質的	評価	成人男女	50	the Child and Youth Resilience Measure (Jefferies et al., 2019) Screen for Child Anxiety Related disorders (Birmaher et al., 1999)
						男性: 25 女性: 25	
⑮	Kalka et al.	2022	量的研究	測定	キープ滞在の成人	50	
⑯	Kim et al.	2023	量的/質的	DPRT	アートセラピスト	64	
⑰	Bottaccioli et al.	2023	量的研究	評価	子ども	81 実験群: 33 対照群: 30 経験群: 19	感情管理教育モデル Didactics of Emotions® The Italian version of Test of Emotion Comprehension (Albanese& Molina, 2008)

中人物画の比較から、構成概念妥当性を検討した。その結果、特定の地域の降水パターンが描画表現に影響を与えることが示唆され、悪天候の描画は描き手のストレスレベルを表すといった雨中人物画の仮説は、検討の余地があることを指摘した。

Chung& Moon (2018) は、大学生のカウンセリングの補助ツールとしての可能性を検討したところ、雨中人物画が大学生の対処行動を評価することに役立ち、適切でない対処行動に苦しんでいる精神障害者を早期に発見できることを示した。

Jue & Ha (2019) は、個人のストレス対処能力を評価するツールとして雨中人物画の適用性を検討した。軍隊の兵士を対象に行われた調査から、軍隊の生活調整得点における高群と低群では、DPRT 評価スケールである PITR-LACK-SRC (Son, 2004) における「リソーススコア」と「対処能力スコア」に差が見られ、また、レジリエンス得点の高群は低群よりも「リソーススコア」が高かった。これらの結果から、雨中人物画が兵士の軍隊の生活調整とレジリエンスを評価するツールとして有用であることを示した。続いて、Jue et al. (2020) では、兵士のユニット（部隊）の結束力を評価するツールとして、雨中人物画の予測力を検証したところ、PITR-LACK-SRC (Son, 2004) における「リソーススコア」がユニットの凝集度を予測する最も強力な指標であることを明らかにした。

2010年代からは、雨中人物画を客観的に評価しようとする試みが盛んにおこなわれており、Krom (2002) または Lack (1996) が提案した評価スケールが改訂されて用いられている。両者の原案を参照することは、2つが未公開の修士論文であるということから入手が難しいが、韓国では Son (2004) によって韓国語に翻訳されて導入されていた。

また近年では、コンピューターを用いた描画の定量的な評価の試みも実施されている。Li et al. (2021) は、2015年に江蘇大学で開発された雨中人物画を評価・採点するためのソフトウェア（中国における著作権局のライセンス取得）を用いて分析を試みた。分析の結果、尺度で測定したストレス反応のレベルが、描画上の雨粒の数、雨粒間の平均距離、紙面上の雨粒に覆われている面積と正の相関があることが示された。雨中人物画においてストレスの指標とされる雨と、ストレス反応との間に関連が見られたことから、雨中人物画分析のソフトウェアによって客観的な分析が可能であることを示した。また Kim et al. (2023)

は、多くの描画を自動で評価する AI システムである AlphaDAPR を提案し、参加したアートセラピストの約 64% が使用の意向を示し、インターフェイスデザインに組み込まれた AI が、使用者にとっての有用性、信頼感、満足感、最終的な使用意向に影響を与えることの重要性を強調した。

3. 個人の能力評価としての活用

雨中人物画は、個人をとりまくストレス状況や、ストレス対処能力を読み取るテストであることから (Hammer, 1958)、研究の中で個人の状態や能力を測定する項目としても用いられてきた。

Theron (2004) は、学習障害のある青年が人生の困難を乗り越え、自己実現を達成することができる個人の性質を明らかにするために、自己概念に関する尺度に加え、雨中人物画を含めた投影法（三匹の動物技法など）を用いた。調査の結果、雨中人物画において、雨から身を守る程度は、個人のレジリエンスのレベルを示す手掛かりとなることが示された。

Demilkhanova (2014) がゲーム・薬物中毒の患者を対象に行った、中毒行動が個人のアイデンティティに与える影響を検討した調査において、HTP や DAP などと共に雨中人物画が用いられた。描画からは、ゲーム中毒患者の 67% に身体のない人物が描かれ、幼児性が見られたことを報告した。また、ゲーム中毒患者は 72% のケースで人の描画が小さかったことから、自尊心が低いことが考えられ、薬物中毒者のグループは 32% のケースで人物描画が小さく自尊心が低い特徴が見られたことを報告した。これらの結果から、薬物中毒患者と比べゲーム中毒患者は、自己概念が形成されておらず、現実認識の歪みがあることが示された。

Rjabikina et al. (2019) の調査において、女子大学生の女性性・男性性の特性と不安の程度を検討するため、雨中人物画は不安の度合いを測定する項目として採用された。調査の中で、不安の高い女子学生の雨中人物画には、不規則な線や二重

線、網掛け線、無秩序な雨が描かれ、傘や避難所、衣服などの保護アイテムが描かれず、水たまりや汚れが描かれていることが分かった。

Kahazova & Shipova (2020) が実施した共依存女性の対処資源としての心の知能の検証では、雨中人物画が調査項目として用いられ、雨中人物画から、不安感、感情的な冷たさ、環境とのコミュニケーションの難しさ、衝動性、幼児性といった共依存者の特徴が裏付けられた。また描画からは、共依存者が必要な資源を持っていること、積極的な対処方略を採用していることも明らかとなった。

Kalka et al. (2022) は雨中人物画を使用して、軍事作戦中にキーウに滞在していた成人を対象に、レジリエンスのレベル（低・中・高）によって、それぞれのレベルの回答者の特性を評価し、区別することが可能であったことを示した。

その他、症例報告であるためレビュー対象とならなかったが、Taranushenko & Tepper (2022) は、反復性呼吸器感染症を患う児童の高次精神機能の評価に雨中人物画を用いており、雨中人物画が幅広く評価指標のひとつとして用いられる可能性がうかがえた。

4. 介入の効果指標としての活用

心理教育や教育プログラムの効果を検証する目的で、雨中人物画が用いられた研究も存在した。

Kravits et al. (2010) は、高ストレス地域で働く看護師を対象に、6時間のストレス対処方略に関する心理教育プログラムを実施し、その介入効果を評価する目的でプログラム前後に雨中人物画を実施した。プログラム後の雨中人物画では、雨量が少なくなり、参加者の57%が低ストレスの基準を満たしていることが示された。

Wood et al. (2012) は、親がHIV関連の病気で亡くなった孤児を対象に、レジリエンスを高めるRead-me-to-Resilience (Rm2R) プログラムを実施し、その効果を検証するためにプログラム前後に雨中人物画を実施した。プログラム後の参加者

の雨中人物画は、プログラム前と比べて、全体的に雨の量や雲が減り、いくつかの描画では保護アイテムである傘が出現していたことから、ストレスへの脆弱性が減少していることが考えられ、子どものレジリエンスが向上していることが示された。この調査における介入の効果検証には、雨中人物画が単独の効果指標として用いられていた。

Bottaccioli et al. (2023) は、小学生を対象に、1年間にわたって感情管理教育モデル (Didactics of Emotions) を実施した効果を検証するために雨中人物画を使用した。雨中人物画からは、家族の面における、現実、ストレス、不安に対処する能力が向上したことが示された。

最後に、介入の効果指標としてではなく、介入そのものに雨中人物画を用いた研究を記す。Mittal & Mahapatra (2021) は、コロナ禍において青年の感情を表現するツールとして、雨中人物画が役立つかどうかを検証したところ、雨中人物画が自分自身と自身の状況や環境を理解しようとする助けになることを示した。

5. 実施法のバリエーション

雨中人物画の実施法として一般的であるのは、A4サイズの白い紙、鉛筆、消しゴムを用意し、「雨の中の人(私)を書いてください」と教示をする実施法である。しかし冒頭に述べたように、本邦においては異なる教示が模索されてきた経緯もあり、各現場において効果的な実施方法が工夫されていることがうかがえる。本稿のレビュー対象の文献に記載されていた、教示と描画後の質問、教育プログラム内での実施について紹介する。

Li et al. (2021) では、参加者は、目を閉じて30秒間瞑想し、瞑想中に浮かんだ情景を描くように伝えられた。ただし、瞑想中に関連するシーンが現れなかった場合は、目を開けて描きたいシーンをスケッチするように教示がされたと紹介されていた。また、Kalka et al. (2022) では、描画後の質問として、「人はどのように感じていますか」

「彼/彼女はどんな気分ですか」「雨の中、どのようにその人を助けることができますか」「雨の中にいるとき、(描かれた)人は自分で何ができますか」「雨はマイナス要因として認識されていますか」といった5つの質問をしていた。調査では、描画後の質問に対して、ストレス耐性のレベル(高・中・低)による典型例を紹介していた。例えば、「どんな気分ですか」という質問には、ストレス耐性が高い群は「楽しい」、中群は「まあまあ」「普通」、低群は「悪い」「悲しい」といった回答が得られたことが示された。また、事例報告であるためレビュー対象とはならなかったが、Davidson et al. (2021)の調査では、芸術療法をベースとした研修医の教育プログラムの中に、雨中人物画が取り入れられた。そのセッションでは、臨床的スキルの獲得や自己認識などをカリキュラム目標として、雨中人物画の体験と共有、臨床現場への適用などの解説が実施された。芸術活動を通じて、研修医が体験的に芸術療法を学び、研修医同士でお互いの苦悩や成功を分かち合うことができたを示した。

IV 考察

本稿では、国外で実施された雨中人物画研究に関する文献17本のレビューを実施した。本レビューで見出された国内の研究の相違や、実施方法の発見、また今後の日本における雨中人物画の発展可能性について論じる。

1. 日本の研究との相違

日本における雨中人物画に関する研究は、病院臨床領域をはじめとして、教育現場、福祉領域など幅広く、特に非行領域によって多く実施されてきた。国外での雨中人物画研究の実施を概観すると、病院臨床領域の中でも、精神疾患だけではなく身体疾患を患う患者(Verinis et al., 1974; Willis et al., 2010; Demilkhanova, 2014)や、その家族(Khazova & Shipova, 2020)、そのケアの立場に

いる看護師(Kravits et al., 2010)、といった様々な立場の者に調査が実施されていた。また、小学生や大学生を対象とした教育現場における研究(Theron, 2004; Chung & Moon, 2018; Rjabikina et al., 2019; Li et al., 2021; Bottaccioli et al., 2023)も盛んに取り組まれていた。日本と大きく異なる対象者としては、親がHIV関連の病気で亡くなった孤児(Wood et al., 2012)、兵士(Jue & Ha, 2019; Jue et al., 2020)、軍事的な窮地にいる成人(Kalka et al., 2022)など、非常にストレスフルな環境に身を置く者を対象として研究が実施されていたことである。日本においては、緒方(2017a; 2017b)が虐待児を対象とした研究を実施しているが、国外のような過酷な環境にいる人々を対象とした研究は盛んでないのが現状である。先述の4つの研究では、レジリエンスやストレス対処能力といった個人のポジティブな力を捉えるためのツールとして用いている。雨中人物画は、導入が容易で侵襲性が低いという特徴があり(吉野, 1993)、描き手の内的世界が自覚的に表現されやすいとされている(仲嶺, 2006)。過酷な環境に身を置く人を対象に研究をする際には、十分な倫理的な配慮をもって実施することが必要なのはもちろんだが、過酷な環境の中で、個人がどのように自分の身を守り、環境に適応しようとしているのか、という側面を捉える際には有用なツールになり得ることが考えられた。

また、多くの研究で、調査項目として雨中人物画が活用されており、特に心理教育などプログラム介入の効果を測定するための項目として用いられていることが多かった(Kravits et al., 2010; Wood et al., 2012; Mittal & Mahapatra, 2021; Bottaccioli et al., 2023)。日本では、澤柳・石川・川口他(1989)による森田療法の過程をアセスメントするための研究や、杉野(1995)によるアルコール依存症者の内観療法前後の変化を捉える研究によって用いられているが、介入の効果を評価する項目として用いられている研究はほとんどな

い。介入の効果検証においては、何らかの数値に変化があることが注目されやすいが、個人の意識的な側面を測定する尺度の数値だけではなく、無意識的な側面を捉える投影法が示す結果から、個人（グループ）の特徴や変化を質的に検討することは有意義であり、日本での活用が期待される。

2. 雨中人物画に関する新たな知見

本稿のレビューは、国外の雨中人物画研究の動向を概観することが目的であったが、文献の中には日本での雨中人物画の実践において有用な知見となるだろう実施法や、描画の解釈が見いだされた。とりわけ、Kalka et al. (2022) の文献に記載されていた描画後の質問は、日本での活用も可能であることが考えられる。描画テストにおいて、描き手が何を描いたのか、どのようなイメージを持っているのか等について聞き取る描画後質問は極めて重要であるが（高橋, 1974）、雨中人物画は発展途上にある描画テストであり、描画後の質問について定型的な質問は定められていない。本レビューで得られた描画後質問に関する知見は、描画のイメージを問う基本的な質問から、個人のストレス対処のキャパシティを問う応用的な質問が挙げられていた。質問の言葉も短く安易であり、日本で導入することも可能であることが推察された。また、雨中人物画の描画解釈や、様々な対象者による描画特徴の出現における知見が見出された。調査ごとに見出された描画の解釈や、様々なクラスターごとの描画表現の出現率については、今後日本においての知見を蓄積していく中で、参考にすべき資料となるだろう。

3. 定量的評価の可能性

ここまで、雨中人物画の客観的な指標が確立されていないことについて、たびたび触れているが、国外では雨中人物画を客観的に評価するための評価スケールが作成されている。本レビューにおいて見出されたスケールは、Lack (1996) によ

て開発された PITR-LACK-SRC, Krom (2002) の雨中人物画評価スケール、PITR-LACK-SRC の韓国語翻訳版 (Son, 2004), Willis et al. (2010) の雨中人物画評価スケール (Krom, 2002) 改訂版, Carney (1992) と Verinis et al. (2006) を参考に開発した Kravits et al. (2010) の評価スケール、といった5つであり、最も使用されていたのは翻訳版も含めて PITR-LACK-SRC (Lack, 1996) であった。この評価スケールは、35項目で、ストレス領域16項目、リソース領域19項目で構成されており、評価尺度は、ストレス尺度、リソース尺度、対処能力尺度の3つである。ストレス得点は、ストレス領域16項目の合計得点、リソース得点は、リソース領域の1~16項目の合計から、同じくリソース領域の17~19項目を引いた得点である。対処能力得点は、リソース得点からストレス得点を引くことによって算出される。3つの尺度から算出された数値は、合計得点が高いほど、測定されている属性が強いことを意味している。このスケールは、評価者が各アイテムの有無をスコアリングしていく非常に簡便なものであるが、日本への導入は進んでいない。描画を得点化し、その数値を単純な結果としてしまうことには注意が必要であるが、評価スケールから算出された数値を解釈の補助として活用したり、ストレス状況のスクリーニングに用いたりするなど、評価スケールがあることによって雨中人物画が説得力のある投影法検査となり、今よりも活用の幅が広がることが推察される。日本での導入にあたり、まずは PITR-LACK-SRC (Lack, 1996) を日本語版として翻訳することが最初の課題だろう。

また近年では、コンピュータープログラムを用いて雨中人物画を評価する試みも行われていることが明らかとなった (Li et al., 2021; Kim et al., 2023)。今後、雨中人物画の活用が学校や企業など大規模な調査・アセスメントに用いられる際、評定者の負担を減らす補助的な手段となり得ることが考えられた。日本で雨中人物画を用いる場面

は、一対一の心理面接や心理検査といった場面が多いことが考えられるが、評定者によってぶれない一定の結果を得ることや、セラピスト（検査者）の負担を減らすことを目的に取り入れることは可能かもしれない。ただし、コンピューター（AI）によって導き出される結果をそのまま信頼することは避けなければならないだろう。

このように、国外では雨中人物画を客観的に評価するための研究が盛んにおこなわれているのに対して、日本においてはそうした研究のほとんどが論文化に至っていないという現状がある（廣田他，2022）。臨床現場において、限られた時間の中で描画テストを用いる際には、バウムテスト等の「よく使われる」テストが選択されることがほとんどであるため（小川他，2011）、使用頻度が圧倒的に低いことが理由として挙げられる。現場において新しい検査を導入するハードルは高く、導入のためには標準化された指標やエビデンスが求められるが、その標準化のためのデータ蓄積が行われる余地がないのが現状であろう。描画を定量的に評価する指標の確立のためには、まずは均質なサンプルを大量に確保することが必要であり、さまざまな年代や属性の人々への実施が求められる。精神的な健康が保たれた群と、臨床群との比較も必要であろう。ただし、雨中人物画が投影法テストであることを考えると、実施に際して被検査者が侵襲的に感じる可能性があるため、学校現場などでの調査協力を得られにくかったり、協力を得られた場合にも被検査者の様子を見守るための対面実施での人的資源の確保といった実施上のコストが大きくなることも、定量的評価に向けた研究の実現を阻んでいることが推察される。

描画を数量化し解釈することは、結果の解釈に信頼性をもたらす一方で、数値化されない個人の特性を掬い上げられず、見落とししてしまうというリスクもはらんでいる。アセスメントツールとして活用していくために、どのような描画表現で定量的な評価ができるのか、どこに検査者による評

価の余地を残すのか、については慎重に検討していく必要があると考えられる。

4. おわりに

雨中人物画テストは、臨床現場において、その時点での個人（クライアント）の心理状態や、ストレス対処能力、リソースなど、様々な情報を視覚的に捉えることのできる有用なツールである。日本での活用において、現時点では共通した客観的な解釈指標は定まっていないという課題がある。描画を定量的に評価することの限界に留意しつつ、国外で実施されている雨中人物画研究から、日本でも描画の評価スケールの導入が進められたり、調査項目として研究に用いられれたりすることで、雨中人物画テストの更なる活用と発展が期待できるだろう。

文献

- Bottaccioli, A. G., Mariani, U., Schiralli, R., Mari, M. G., Pontani, M., Bologna, M., Muzi, P., Giannoni, S. D., Ciummo, V., Necozone, S., Cofini, V., Chiariotti, L., Cuomo, M., Costabile, D. & Bottaccioli, F. (2023). Empathy at school project: Effects of didactics of emotions® on emotional competence, cortisol secretion and inflammatory profile in primary school children. A controlled longitudinal psychobiological study. *Comprehensive Psychoneuroendocrinology*, 14, 1-9. <https://doi.org/10.1016/j.cpnec.2023.100183>
- Carney, S.M. (1992). *Draw a person in the rain: A comparison of levels of stress and depression among adolescents*. Pace University.
- Chung, K.S. & Moon, W. H. (2018). The Person-in-the-Rain Projective Drawing as a Measure of Coping Strategies in Korean College Students. *Indian Journal of Public Health Research & Development*, 9, 3, 816-822.
- Demilkhanova, A. (2014). Comparative Analysis of Computer and Drug Addiction. *International Journal of Advances in psychology*, 3, 1, 10-13.
- 藤掛明 (2000). 雨の降る情景…「雨の中の私」画という描画法. 刑政, 111, 2, 46-51.
- Graves, A., Jones, L. & Kaplan, L. L. (2013). Draw-a-Person-in-the-Rain: Does Geographic Location Matter? *Art Therapy*, 30, 3, 107-113. <https://doi.org/10.1080/07421656.2013.819282>
- Hammer, E. F. (1958). *Clinical application of projective drawings*. Illinois: Charles C. Thomas.

- 廣田 愛海・平野 真理・三浦 正江 (2022). 日本における雨中人物画の解釈の精緻化に向けた現状と課題 東京家政大学研究紀要, 62, 1, 89-96.
<https://doi.org/10.20838/00012222>
- 板橋 登子 (2017). 雨中人物画からみる物質使用障害入院患者のストレス対処能力について 日本心理学大会発表論文集, 81, 336.
https://doi.org/10.4992/pacjpa.81.0_3A-022
- Jue, J.& Ha, J. H. (2019). The Person-in-the-Rain Drawing Test as an Assessment of Soldiers' Army Life Adjustment and Resilience. *Psychology*, 10, 1418-1434.
<https://doi.org/10.4236/psych.2019.1011093>
- Jue, J., Ha, J. H.& Jang, Y. (2020). The Person-in-the-Rain Drawing as a Predictor of Conscript Soldiers' Unit Cohesion. *Psychology*, 11, 4, 594-605.
<https://doi.org/10.4236/psych.2020.114040>
- Kalka, N., Blikhar, V., Tsyvinska, M., Kuzo, L., Marchuk, A.& Katolyk, H. (2022). Analysis of Peculiarities and Components of Resiliency of People Facing Military Aggression against Ukraine. *BRAIN. Broad Research in Artificial Intelligence and Neuroscience*, 13, 3, 320-339. <https://doi.org/10.18662/brain/13.3/370>
- 加藤 由紀・山下 委希子・仲嶺 裕子 (2008). 雨中人物画法において描き手は「雨のイメージ」と「私の気持ち」をどのように表現するのか—他者から見た絵の印象及び精神的健康との関連から—臨床描画研究, 23, 159-177.
- Khazova, S. A.& Shipova, N. S. (2020). Emotional Intelligence as a Resource for Codependent Women. *Personal and Regulatory Resources in Achieving Educational and Professional Goals in the Digital Age*, European Proceedings of Social and Behavioural Sciences, 91, 212-219.
<https://doi.org/10.15405/epsbs.2020.10.04.27>
- Kim, J., Kang, J., Kim, T., Song, H.& Han, J. (2023). AlphaDAPR: An AI-based Explainable Expert Support System for Art Therapy. *Proceedings of the 28th International Conference on Intelligent User Interfaces*, 19-31.
<https://doi.org/10.1145/3581641.3584087>
- Kravits, K., McAllister-Black, R, Grant, M.& Kirk, C. (2010). Self-care strategies for nurses: A psycho-educational intervention for stress reduction and the prevention of burnout. *Applied Nursing Research*, 23, 3, 130-138.
<https://doi.org/10.1016/j.apnr.2008.08.002>
- Krom, C. P. (2002). *Hospice nurses and the palliative care environment: Indicators of stress and coping in the Draw-a-person-in-the-Rain test*. Unpublished master's thesis, Albertus Magnus College, New Haven, Connecticut.
- 久保 勉・雨宮 一洋 (2001). 描画「雨の中の私」に関する研究 犯罪心理学研究, 39, 特別号, 70-71.
- 黒川 潤・宇田 潔子・渡邊 悟 (2002). 描画「雨の中の私」に関する基礎的研究 (1) 犯罪心理学研究, 40, 特別号, 60-61.
- 黒川 潤・宇田 潔子 (2003). 描画「雨の中の私」に関する基礎的研究 (3) 犯罪心理学研究, 41, 特別号, 66-67.
- Lack, H. (1996). *The Person-in-the-Rain Projective Drawing as a Measure of Children's Coping Capacity: A Concurrent Validity Study Using Rorschach, Psychiatric and Life History Variables*. Unpublished Doctoral Dissertation, Los Angeles CA: The California School of Professional Psychology.
- Li, Z., Liu, G., Liu, Y.& Ma, Z. (2021). Using a computer scoring system to correlate stress response and indicators in the Draw-a-Person-in-the-Rain Test. *Social behavior and Personality*, 49, 1, 1-13.
<https://doi.org/10.2224/sbp.9619>
- 丸山 もゆる・関谷 益実・外川 江美・武田 陽子・渡邊 悟 (2003). 「雨の中の私」画における雨よけの意味について (1) 犯罪心理学研究, 41, 特別号, 62-63.
- 三上 尚子 (1995). S-HTP法 統合型HTP法の臨時的・発達のアプローチ 誠信書房
- Mital, S.& Mahapatra, M. (2021). Assessment Of Resilience And Anxiety Among Adolescents Using Person In The Rain Technique: Covid 19 Perspective. *Webology*, 18, 4, 39-47.
- 森川 友子・平井 達也 (2010). 大学生における「雨の中の私」画とストレス反応・ストレスコーピングとの関連—人物の感情に注目して—九州産業大学国際文化学部紀要, 47, 163-179.
- 森川 友子 (2012). 大学生の「雨の中の私」描画における気になる描画特徴の検討～ストレス反応及びコーピングとの関連～九州産業大学大学院心理学論集, 8, 3-13.
- 仲嶺 裕子 (2006). 投影の観点からみた不登校生徒との心理療法過程 カウンセリング研究, 39, 308-316.
- 仲嶺 裕子・島田 さつき (2008). 「雨の中の私」画を用いた保健室登校女兒とのかかわり カウンセリング研究, 41, 315-322.
- 野口 つばさ・馬場 史津 (2016). 雨のイメージと「雨の中の私」の関連について 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 15, 第1・2合併号, 19-25.
- 緒方 康介 (2017a). 虐待の被害によるストレスは「雨の中の私」に表現されるのか? 犯罪心理学研究, 54, 特別号, 12-13.
- 緒方 康介 (2017b). 虐待された子どもが描く「雨の中の私」とトラウマ反応—「雨ニストレス」仮説の検証— 犯罪心理学研究, 83, 1, 3-8.
- 小川 俊樹・岩佐 和典・李 貞美・今野 仁博・大久保 智紗 (2011). 心理臨床に必要な心理査定教育に関する研究 第1回日本臨床心理士養成大学院協議会研究助成 (B研究助成) 研究助成報告書.
- 小澤 功滋・与那覇 聡・沼田 朋枝・川田 幸司・森田 紀之 (2005). 「雨の中の私」画と生活状況の比較検

- 討 犯罪心理学研究, 24, 特別号, 98-99.
- Proto, M. (2007). *The Draw-a-Person-in-the-Rain Test to assess burnout in prosecuting attorneys*. Unpublished master's thesis, Albertus Magnus College, New Haven, Connecticut.
- Rjabikina, Z., Hozjainova, T., Hozjainova, P.& Prisiagin, P. (2019). Gender transit as a factor of anxiety of personality of female students. *SHS Web of Conferences*, 70, 08033. <https://doi.org/10.1051/shsconf/20197008033>
- Rossi, A. (1997). *The Draw-a-Person-in-the-Rain Technique: A study to determine its use as an informative, adjustment tool for direct practice social workers*. Unpublished master's thesis, Southern Connecticut State University, New Haven, Connecticut.
- Russo, A. (2007). *The Draw-a-person-in-the-Rain Technique to assess stress in elementary school professionals*. Unpublished master's thesis, Albertus Magnus College, New Haven, Connecticut.
- 澤柳 志津江・石川元・川口 浩司・大原 健士郎 (1989). 「雨中人物画」にあらわれた森田療法の治療過程 臨床精神医学, 18, 1, 81-89.
- 澤柳 志津江・石川元・稲川美也子・川口 浩司・大原 健士郎 (1991). 森田療法における雨中人物画 (Draw-A-Person-in-the-Rain-Test) の活用 臨床精神医学, 20, 12, 1953-1962.
- 関谷 益実・丸山もゆる・外川江美・武田 陽子・渡邊 悟 (2003). 「雨の中の私」画における雨よけの意味について (2) 犯罪心理学研究, 41, 特別号, 64-65.
- Son, M. (2004). *The Study about Stress and Coping Behavior of Elementary School Students with PSTR*. Unpublished Doctoral Dissertation, Busan, South Korea: Kyungsung University.
- 杉野 健二 (1995). アルコール依存症の内観療法前後の「雨中人物画」の変化 臨床描画研究, X, 169-183.
- Davidson, M.D., Benson, N.M.& Beach, S. R. (2021). Drawn Together: a Curriculum for Art as a Tool in Training. *Academic Psychiatry*, 45, 382-387. <https://doi.org/10.1007/s40596-020-01345-3>
- 高橋 京子・山路 めぐみ・松本 和雄 (1999). 雨中人物画の学校保健的考察 関西大学教育学科研究年報, 25, 7-13.
- 高橋 雅春 (1974). 描画テスト入門 文教書院
- 丹治 光浩・松本 真理子・今泉 寿明 (1993). 描画法におけるストレスの投影性に関する研究—課題画「坂道と私」「雨の中の私」の比較を通して— 臨床描画研究, VIII, 202-212.
- Taranushenko, T. E.& Tepper, E. A. (2022). Infectious Diseases as A Risk Factor for Impairment of Mental Functions and Deterioration of Academic Performance at School. *Frontiers in Medical Case Reports*, 3, 3, 1-8. <http://dx.doi.org/10.47746/FMCR.2022.3301>
- Theron, L. C. (2004). The role of personal protective factors in anchoring psychological resilience in adolescents with learning difficulties. *South African Journal of Education*, 24, 4, 317-321.
- 友利 幸之介・澤田 辰徳・大野 勘太・高橋 香代子・沖田 勇帆 (2020). スコーピングレビューのための報告ガイドライン日本語版: PRISMA-ScR 日本臨床作業療法研究, 7, 70-76.
- 宇田 潔子・黒川 潤・渡邊 悟 (2020). 描画「雨の中の私」に関する基礎的研究 (2) ~非行少年の自己評価について~ 犯罪心理学研究, 40, 特別号, 62-63.
- 宇田 潔子・黒川 潤 (2003). 描画「雨の中の私」に関する基礎的研究 (4) ~人物の諸特徴について~ 犯罪心理学研究, 41, 特別号, 68-69.
- Verinis, J.S., Lichtenberg, E.F.& Henrich, H. (1974). The Draw-a-Person-in-the-Rain technique: Its relationship to diagnostic category and other personality indicators. *Journal of Clinical Psychology*, 30, 407-414. [https://psycnet.apa.org/doi/10.1002/1097-4679\(197407\)30:3%3C407::AID-JCLP2270300358%3E3.0.CO;2-6](https://psycnet.apa.org/doi/10.1002/1097-4679(197407)30:3%3C407::AID-JCLP2270300358%3E3.0.CO;2-6)
- Willis, L.R., Joy, S.P.& Kaiser, D.H. (2010). Draw-a-Person-in-the-Rain as an assessment of stress and coping resources. *The Arts in Psychotherapy*, 37, 233-239. <https://doi.org/10.1016/j.aip.2010.04.009>
- Wood, L., Theron, L.& Mayaba, N. (2012). 'Read me to resilience': Exploring the use of cultural stories to boost the positive adjustment of children orphaned by AIDS. *African Journal of AIDS Research*, 11, 3, 225-239. <https://doi.org/10.2989/16085906.2012.734982>
- 与那覇 聡・森田 紀之・中嶋 彰 (2001). 描画「雨の中の私」における雨避けが不十分な描画の検討 犯罪心理学研究, 39, 特別号, 98-99.
- 与那覇 聡・小澤 功滋・沼田 朋枝・川田 幸司・森田 紀之 (2005). 描画「雨の中の私」の検討雨避けと運動の有無と、防衛の成否との関連性について 犯罪心理学研究, 42, 特別号, 100-101.
- 吉野 啓子 (1993). 精神医学用語解説 109. 雨中人物画 臨床精神医学, 22, 7.
- 寄重 賢太・森田 紀之・沼田 朋枝 (2006). 「雨の中の私」画と生活状況の比較検討 (2) 雨描写の仕方及び人物の運動の有無と、実際の生活状況との比較 犯罪心理学研究, 43, 特別号, 170-171.